石神遺跡の調査（飛鳥藤原第156次）

石神遺跡は斉明朝の饗宴施設と推定されますが、それ以外にも７世紀代を通じて造営が繰り返されたことが明らかになっています。

今回の調査は、遺跡の東限とその周辺を明らかにするのを目的としました。調査は10月から始まり３月まで続きました。その結果、７世紀前半と後半の２回の整地土の上に重なり合う掘立柱建物や塀などの遺構が多数確認されています。みつかった遺構の変遷は、８時期に分けられます。

今回の調査区の北側にある昨年度の調査区では、７世紀中頃とみられる南北方向の建物が確認され、これを石神遺跡の東限施設と推定しました。今回、この建物の続きとみられる大型の総柱建物を検出しました。さらにこの総柱建物以前にも、ほぼ位置を同じくする塀と建物を検出しました。このように、７世紀前半から中頃にかけて、東限を区画する施設は２回の建て替えがあったようです。また東限区画施設の東側には、遺構の展開が希薄で、ここに幅16m程度の通路が存在したと推定されます。

さらに、東限区画施設よりも古い南北方向の溝を確認しました。この溝はクランク状に折れ曲がり、基壇をともなうと考えられます。この溝からは大量の瓦が出土しました。この瓦が葺かれていた建物は、もしかすると仏教施設だったかもしれません。

７世紀後半にも再度の大規模な整地をおこない、東限施設も通路も消え、建物や塀が点在するようになります。このことからも遺跡の性格が７世紀後半に大きく変化したことがわかりました。

（都城発掘調査部　青木 敬）

7世紀前半～中頃の東限施設群（北から）